
優しい夜の訪問者

狭間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優しい夜の訪問者

【Nコード】

N3295G

【作者名】

狭間

【あらすじ】

私は祖母の家で優しくて少し変わった訪問者であったのだ……

夜の廊下でりりりと電話が鳴る。祖母が住んでいたこの家はとても古く、設置されている電話機も昔ながらの黒電話だ。普段暮らしていない家なので電話の位置が分からず、音を頼りに探すしかない。相手が切る前に出なければ…。そう思っただけで冷たい床下を爪先立ちで急いで渡る。

大好きだった祖母が亡くなったのは三日前。死に際に立ち会えたのは私と母だけだった。父は仕事だったし、弟は東京に出ていたせいで間に合わなかった。その後母は後から来た父と合流し親戚の家に泊まっているが、私は明日の朝やって来る弟を迎えるために祖母の家にいることにした。

りりりん。嫌だなあ。私は鳴っている電話を前にしてそう思う。祖母の死を知らない人間にそれを知らせることがだし、知っていたとしても話題は自然と祖母のことになるだろう。この家に来てから祖母の生活していた跡を見ると何度も泣きそうになる。祖母の帰りを待ちわびているのはここにある家具と猫だけではないのだ。会いたいなあ。そんなことを思ってしまう。それでも電話を無視するわけにはいかないのだからと下唇を噛んで受話器に手を掛ける。

「はい、もしもし月見です。」
「…。」

しばらくしても返事がなく、悪戯電話かと思っただけで受話器を耳から離そうとする。

「あの…文恵さんでは…ないですよね。」
小さな男性の声。思わず離しかけた受話器を耳に押し付ける。

「はい。孫の藍華です。その…祖母は今…」
不幸を告げるべきかどうか迷った。知り合いなら告げるべきだし、そうでないなら気を使わせるだけだ。

「そうですか…今いないのですか。困ったなあ…。困った。」

「あの、私であれば用件を伺いましょうか？」

そう言うとしばらく相手は考え込むような空気を受話器越しに沈黙で伝えつつ、またちよつとしてから尋ねてきた。

「あの、藍華さんとおっしゃいましたよね。」

「はい。」

「文恵さんの孫の？」

「はい。」

また沈黙が続く。そんなに大事な話なのだろうか。だったら私がどうにかできることではないのかもしれない。変な気配りをしちゃったかな。そう思っていると相手は今まで以上に小さい声でつぶやいた。

「文恵さんは…亡くなったのですか？」

私は驚いてしまう。どうして分かったのだろう。電話の相手は返事も聞かずに続けた。

「そうですか…。文恵さんが…。ではあなたにお願いさせてもらっても良いですか？これからそちらに向かいますので。夜分失礼かとは思いますが、少し事情がありますので…。」

私はさっきの驚きが尾を引いていて、はいといつい答えてしまった。すると相手は礼を告げてすぐに電話を切ってしまう。名前を聞き忘れた。そのことに気が付いたのは受話器を下ろした後だった。

10分後玄関のチャイムが鳴る。電話の主だろうか。いやそれにしても早い。それでも私は玄関に駆けつけてがらつと扉を開ける。だがそこには誰もいなかった。おかしいな。辺りを見渡すが人影もない。少し怖くなって扉を閉めようとした。

「あの…」

「ひゃっ!？」

驚いてつい声が出てしまう。先程の声だ。いつの間にと違って探してみるが誰もいない。トントン、何かが私の足をたたく。急いで視線を下に下ろすと…

兎がいた。え？ 兎!？

声をあげなかったのは上出来といえるだろう。白い産毛に赤いビー球を埋め込んだような可愛らしい顔がこちらを覗いている。

「すみません。驚かしてしまって、私が人前に出られないのはこういう訳でして…」

ぷつ。思わず噴出してしまった。鼻がひくひくして兎そのままの雰囲気なのに丁寧な言葉を使うのが可笑しかったのだ。すぐに失礼だったかと思って私は謝ろうとしたが、彼（？）も可笑しそうに笑った。

「ふふ。この姿を見ても驚いたり気味悪がったりしないんですね。文恵さんのときを思い出しますよ。初めましてエトラと申します。まあ見てのとおり兎なんですけどその…本当は宇宙人といったほうが正しいのかもしれない。」

「宇宙…人？」

私は不思議そうに尋ねた。

「はい。月に住んでいます。で、日本人の皆さんのご期待通り餅を突いている訳なんですけど毎月この日の夜はもち米を受け取りに来ておりました…」

なるほど。だから祖母の家に…。私は納得する。祖母は米屋を営んでいた。今はもう店は開いていないがそれでもこの家に置かれている大量の米は何のためにあるのか不思議に思っていたのだ。

「わかりました。裏の台所の方に積んであるので持ってきますね」
そう言うときエトラは耳をピンと立ててすぐに答える。

「いえ、あとで仲間が運びに来ますから。それよりあの線香をあげさせてもらえませんか？」

有難い申し出だがまだ祖母の仏壇はできていないので丁寧にそれを告げると彼の耳はしゅんとしてうつむいてしまった。

「そうですか三日前に…」

雰囲気がどんどん暗い方向に向かっているのに気づき私は慌てて話題を変えようとする。

「あの…。私のことを聞いて祖母が亡くなったことを知ったようで

したがあれば…」

彼は顔を上げた。相変わらず鼻をひくひくさせたままだ。

「ああ、文恵さんから伺っていたんですよ。彼女がお亡くなりになったら孫がいるから大丈夫だと。決して驚いたりするような子ではないから…」と。私は縁起でもないといったのですがまさか次の月に亡くなるなんて。気づいていたんですかねえ。」

また暗い雰囲気になってしまった。私はまたほかに話題を探す。

「でも兎が月でもちをつくのって本当だったんですね。私てつきり迷信だと思っていました。」

「あの影は私たちが投射したものですよ。日記みたいなものでね。遊び心といいましょうか。今ある月の影も私たちにとってはちゃんと意味のあることなんですよ?」

彼は楽しそうにそう言った。よくわからないが簡単に月と地球を行って帰るのだ。人間よりずっと頭がいいのだろう。私はもつと色々尋ねようとしたが彼の耳がピンと立ち上がりそれを遮った。

「どうやら仲間が来たようです。そろそろ失礼します。あの…遅ればせながら藍華さん。…お悔やみ申し上げます。」

彼はそう言ってペコリと頭を下げる。それからピョンピョンと玄関に向かっていく、私も着いていくとどうやって入ったのか沢山の兎がそこにいた。黒い兎から斑の兎のまで。

彼らは勝手知ったるように台所に向かうエトラについていく。私は動かずそこにいたがしばらくしてすぐにかれらはもち米の袋を持って戻ってきた。二匹で4、5袋持っている姿には驚かされたが彼らはそれを苦にもせずどんどん玄関の外へ運び出してゆく。

最後に残ったエトラは丁寧に頭を下げた。

「夜分遅くに失礼しました。それでは…」

私は帰ろうとする彼を見送りながら声を掛けた。

「来月も用意しておきますからまた来てください。」

エトラは鼻をひくひくさせて笑っていたのだろうか優しい目つきをしてもう一度頭を下げた。

「おやすみなさい」

そう言つて彼はこの家を後にした。

次の朝私が昨夜のことを夢ではないかと思つたのは言うまでもないが、置いてあつたもち米が無くなつたのを見て確信を持つたのだ。

告別式も葬式も私はずっと祖母との思い出に浸つていた。亡くなつたのは祖母の方なのに走馬灯のように思い出すのは私の方だ。実感というものが今ひとつ足りなかつたようだが、本当に祖母がいなくなつてしまつたと気づいたのは火葬のときだつた。火葬した骨はもう祖母の面影をどこにも残していなかつた。祖母の願いどおり祖父の墓に埋められることになつた遺骨は骨壺に納められ、出棺して行つたのだ。

「本日は本当にありがとうございました。」

葬式が終わつたあとに来てくれた人たちに家族で挨拶をし終わり、家に戻ると私は泣いた。遺体を焼く前に花を供えたときにも沢山泣いたのだが私はもう一度泣いた。声を上げて泣くことが出来るのは今だけだ。そう思つて。ずっと、ずっと泣き続けて目もはれて声も枯らしてようやく泣き止んで空を見上げると綺麗な満月が浮いていた。

『文恵さん 今までありがとうございました』

ぐちゃぐちゃの影で読みにくくもあつたが、そこには確かにそう書いてあつた。

私はふつと笑つて優しい眠りに落ちていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3295g/>

優しい夜の訪問者

2010年10月21日20時08分発行